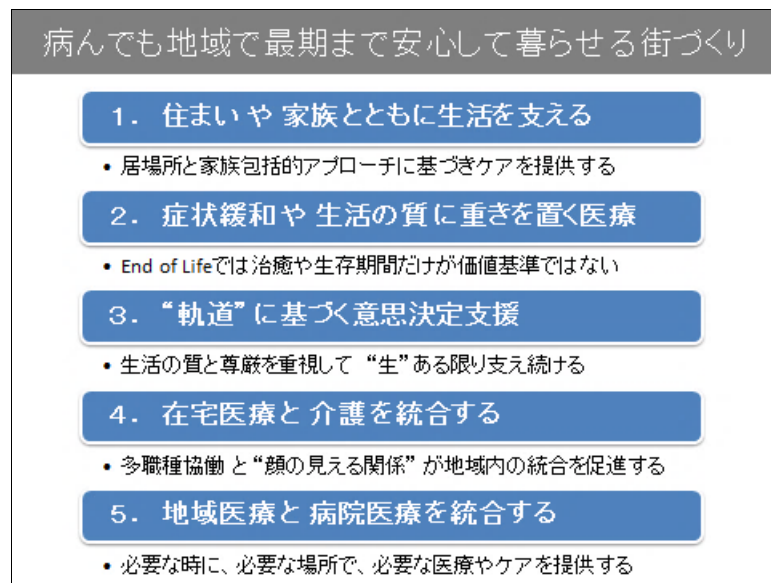


地域包括ケア時代の在宅医療 ～病んでも地域で最期まで安心して暮らせる街づくり～

あおぞら診療所 川越 正平

【抄録】

地域包括ケアの推進が叫ばれる時代に地域においてなすべきことを下図に列挙した。冒頭の話題として、サザエさん一家の 30 年後を想定し、住まいや家族とともに療養者の生活を支えることの重要性を確認する。次に、医療提供にあたっては、治癒できないとしたら症状緩和や生活の質がより大切な目標となること、予測される今後の臨床経過、すなわち“軌道”を熟知しつつ伴走し続けることが適切な意思決定支援につながることを強調する。さらに、地域において在宅医療と介護、そして病院医療を統合することの意義を、多職種協働、顔の見える関係、ホスピタライゼーションをキーワードに挙げて解説する。以上のような取り組みを地域で進めることが、病んでも最期まで安心して暮らせる街づくりにつながるものと期待する。



【略歴】

1991 年東京医科歯科大学卒。虎の門病院内科レジデント、同院血液内科医員を経て、1999 年に医師 3 名のグループ診療の形態で在宅医療を中心に行うあおぞら診療所を千葉県松戸市に開設。

東京医科歯科大学臨床教授、日本在宅医学会理事（大会運営委員会委員長）、地域包括ケア研究会（2012・2013）委員、厚生労働省在宅医療連携拠点事業受託（平成 23・24 年度）、千葉県松戸市在宅医療連携拠点事業受託（平成 25 年度）。

【著書】

「在宅医療バイブル」（2014、日本医事新報社、編著）

「日本緩和医療学会 在宅緩和ケアガイドブック」（2010、青海社、分担執筆）